

弘前市協働によるまちづくり推進審議会 会議録概要 (第2回)			
日時	令和4年9月2日(金曜日) 18時00分～20時00分		
場所	弘前市役所市民防災館3階 防災会議室	傍聴者	1人
出席者 (18人)	委員 (13人)	佐藤会長、野口委員、下山委員、大村委員、大西委員、 鴻野委員、安田委員、大塚委員、葛西委員、斎藤委員、 花田委員、松山委員、女川委員	
	執行 機関 (5人)	市民協働課	高谷課長、村田課長補佐、 菊池主幹兼協働推進係長、田澤主査、片岡主事
会議概要			
1 開会			
2 議事			
<p>条例に関する事業の実施状況の評価及び改善点等について審議 「協働の自覚につながる情報発信の取り組み」</p> <p>(1) 今年度における審議方針、本日(第2回)の審議内容について</p> <p><b>【事務局から説明】</b></p> <p>会 長：資料について、私の方からも趣旨を説明させていただきます。「市民主体のまちづくりを促す情報提供」は、これまで何度も議論してきた問題であって、市民主体のまちづくりが活発であることが、協働によるまちづくりの基礎をなすということはもちろんですし、重要でありますけども、「協働によるまちづくりを市民に促す情報提供」については、今まで協働の意味を曖昧にしたままで議論してきたように思います。そこで、第1回審議会では協働の意味を皆さんで話し合って、合意形成いたしました。今年度は、その合意形成した「協働」というところに焦点をあてながら、市民主体のまちづくりをどのように協働につなげていくかということで、議論を深めていただければと思います。</p> <p>それでは、「協働の自覚につながる情報発信の取り組み」という諮問事項に対して、今年度は、具体的には「協働によるまちづくりを市民に促すための市民協働課の情報発信」と、「市と市民が共通の課題に対して取り組む、協働するための市(各課)の情報発信」という二つの内容から、諮問</p>			

事項に答える内容を作り上げていきたいと思っております。皆さまの活発なご意見が、諮問事項の内容になって参りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

## (2) 協働によるまちづくりを市民に促すための市民協働課の情報発信

### 【市の取り組み状況を事務局から説明】

### 【各委員の意見等】

会 長：ありがとうございます。市民協働課の精力的な活動に敬意を表したいと思います。これらの活動を「誰もがいつでもどこでも住んでよかったと思える弘前市を市が中心となって市民に呼びかけ、市と市民が共通の課題を協働して作り上げる過程」という視点から、あらためてご検討いただいて、協働という言葉の意味を正確にしていけたらと思っております。また、「協働によるまちづくり情報がより効果的に対象に届く手段・内容になっているか。」「市民目線に立った協働によるまちづくりのメリットや定義を伝えているか。」「誰もが協働によるまちづくりの一員という意識を持ち、自発的な取り組みにつなげるための発信になっているか。」という審議の視点も含めて、事務局が説明してくださったことをたたき台にしながら、これから市民協働課が協働によるまちづくりを進めていくためには市民にどういう情報を提供していったら、どんなふうに提供していったらいいか、ということをご議論いただきたいと思います。いかがでしょうか。

委 員：資料にある YouTube も広報ひろさきも、たぶんそこまで見る人の意識は薄いと思うので、弘前市独自のアプリケーションを作ると良いと思います。アプリケーションは、双方向になる可能性がとても強いと思います。例えば市独自でアンケートに答えたら何ポイントとか、これに参加したら何ポイントとかいうようにポイントを加算して、それが誰でも普段の生活に使える何か、そういうお店からも協賛をいただいて、上手くアプリケーションを使ったら得ですよ、というような利点を持たせたものを作ってみてもいいのではないかなど。また、簡単に

できるものではないので、試験的に作ってみて、例えば大学や高校に協力いただいて、作る段階においても弘前には全国から来た学生がいますので、地域が違って不便だったことなどを意見としてもらい、それを何個かの大きな柱にして、アプリケーションから詳しいことはすぐホームページに飛べるようにするなど、やってみてもいいのかなと思います。マチイロ（自治体の広報誌閲覧アプリ）も見てみましたが、情報はあるのに自分が見たいところにいけるかなあと感じますし、一方的な気がします。ホームページは、大きなホームページから探して、文章読むのはきっと面倒です。今は、みんなスマホで情報を検索して行って、デパートでもアプリケーションを使って、割引を使うなど年齢関係なくやっていて、とても身近なものになっているので、試してみてもいいのではないかなと思います。

会長：どうもありがとうございます。市民目線に立った時に、例えばそういうのがあれば良いですね。

委員：市内や県内の情報関係・工業関係の高校生も、いろいろ挑戦していますし、大学生もパソコンやスマホには強いと思うので、どういうのが欲しいのか、こういう特典があったらやりやすいかとか意見を聞いて、大人だけではなく、いろいろな年齢層の人と協働してアプリケーション作って何回でも試す。そして、メディアにも出すなど上手くコマーシャルもしていった方がいいと思います。やってみる価値はあるのではないのでしょうか。

委員：ちょっと極端な話になるかもしれませんが、あとは誰に向けて情報発信するのかというところになると思います。例えば、まちづくりに興味がない人にとっては、この情報発信している内容や言葉では、全部難し過ぎるような気がします。大事ではありますが、協働とは何かとか、まちづくりとは何かとかになると、堅苦しくて、そこで拒否反応でそこから入っていかないっていう人は、もしかしたらたくさんいるのではないかなと。事例紹介でも、1%システム補助金で活動している団体を紹介することは素晴らしいことですが、やったことがない人から見ると、これは無理だな、俺のやることじゃないなとか、その

ギャップが大きければ大きいほど、少し拒否しちゃうような感じがします。もちろんこういうふうな情報発信は、必要とする人もいるし、そういう人たちには大事かと思いますが、これとは別にあまり興味ない人でも、例えば自分たちの生活に身近なもので、簡単な言葉で、まちづくりが直でなくても第一歩につながるような、伝え方みたいなのがあればいいなと思います。例えば、ごみ問題であれば、「街中でごみが落ちていたら拾って近くのごみ箱に捨てませんか」、雪問題だったら、「自分の家の雪を掻いたら、隣の家のお雪も一掻きしてみませんか」、子どもの安全とかであれば、「登下校の時間に合わせて、今日のお散歩、午後3時にしませんか」など。具体的ですぐ出来て、別にまちづくりを意識しなくても取っ掛かりになるようなことを、発信できたらいいと思います。市役所の各課が広報などに掲載している取り組みや行事を、できるだけ短く簡単な言葉にして、取り組みやすいような内容にして、「今日やってみませんか？」ということに引っかけて、例えば「今日、どう（協働）？」というふうな感じで、あえて難しい協働でなくて、後から協働につながるんだよという雰囲気のをできるだけ継続して、長く伝え続けられればいいのかな。そのために例えば広報ひろさきや SNS で、小さいコーナーに「こういうふうなことどうですか？」みたいなことを掲載する。レベルは低いかもしれないが、興味ない人への入口づくりという意味では、できるだけ情報をコンパクトにして発信をしていくものがあっても良いと感じました。

委員：私も WEB や LINE に賛成です。私は、ごみアプリを便利に使っていますが、生活に密着したアプリでさえ、ダウンロード数が世帯数より少ない1万5千というのが現実です。本当に便利ですが、そういうことでさえも、きちんと伝えることができていないです。いいアプリを出しているのだから、どこの数を指すのかっていうところは、検討していただけたらいいなと思います。協働のまちづくりは、市民協働課だけが頑張ってもだめだと思います。何かをしなければ、それがまちづくりではないという印象を、頑張れば頑張るほど与えてしまうことになるのではないのでしょうか。学生ジャーナリストの最優秀賞が「猫たちの命を救うために」という活動を取材しているということが、素晴らしいなと思っています。こういう活動が協働なんだというのを伝え

ると、「あら、うちの猫ちゃんも」ってみたいいな感じになったりします。何かやわらかい印象を与える工夫が必要です。市民協働課だけが頑張っても難しいというのは本当に実感しています。こちらが協働だと思っても、他の課から突っぱねられることもあります。まず市役所の中でも、取り組みを一緒にやっていくという意識の調整も必要だし、市民にはやわらかく簡単に出来るというようなことを伝えることが必要だと思います。

委員：学生に一番響いた、これなら見るという行政のホームページは、福井県鯖江市でした。元々ゆるさを全面的に推している自治体ですが、学生やそもそもまちづくりに関心を持っていない若い子にとっては、砕けた感じやフランクな感じで発信をしていかないと、なかなか響かないのではないのでしょうか。やっぱりこういうのが大事なのかなと思いました。市民協働課の YouTube の中でも、雪の排雪構に関しては、唯一10倍くらい閲覧件数がありますが、雪が大変みたいなのをドヤ顔でツイートするとか、全編津軽弁で YouTube 配信を津軽弁バージョンで、下に字幕もつけてやるとか。企画課の市民ライター制度の取り組みを見ていると、県外出身者は3割もわからないようなものの方が、もしかしたら見たのかもしれないなって、感じることもあります。

委員：私もよく SNS は見ますが、学生で Facebook やっている人は最近見ないです。Twitter も確かに拡散力がありますが、結構バズるのは難しいと思いますし、YouTube 再生数も伸ばすのがとても難しいと思います。インスタグラムであれば写真媒体なので、どの世代でもわかりやすく見ることができると思うので、インスタグラムの活用を進めていければいいのではないかと思います。その他、YouTube は、市民協働課の職員だけが、作成する側になっていて、市民は見る側ですが、市民も市民協働課もみんなが作る側であり、見る側になるという考え方に変換していったらいいのではないかと思います。協働ということなので、例えば弘前大学工学部のようにパソコンが得意な人や編集できる人と一緒に取り組んでいくことで、弘前の活動の貢献にもなりますし、自身の経験とか技術の積み重ねにもなるのではないかと思いますので、一緒に活動していけるように、学生の意見を聞きながら進めると良いの

ではないかと思いました。

委員：私は、情報を探す時に、市役所のホームページで情報を見ますが、すごく情報が探しにくいです。分け方がもう少しわかりやすい言葉であれば、見たいと感じると思いました。そして、YouTube は、楽しく見たいなと思う人が多いので、きちんとした目的に沿ってやると思いました。

委員：YouTube の登録者数よりも多い再生回数の動画がたくさんあるのは、すごいですので、続けていったらいいと思います。やり方はもう少し考えなきゃいけないのかもしれませんが、上手くできているものは、どんどん続けていったらいいと思います。さまざまなツールを使っていますが、それぞれで誰に何を伝えたいのかや目標設定があまり明確でないと感じます。あとは、非常に情報が多い。例えば、回覧板の中にも QR コードの書いてある紙が一枚回って来たら、何だろう読み込んでみようかなと思います。押すなよってという感覚と一緒に押したくなる。ちょっと砕けたようなキャッチーなことに一度トライしてみるというのも良いかと思います。いまの路線では少し固いかな。結果的にそれって協働なんです、というような発信の仕方に変えていいと思いました。

委員：弘前市民は年齢構成が幅広いです。この町に住んで良かった、住ませてあげたいという気持ちになるのは、やっぱり隣近所の声掛けがあったからこそという感じがします。これからの協働によるまちづくりを考えていくなれば、年齢構成や住んでいる箇所によって、生活の仕方が違いますから、どの箇所の人達でも、弘前に住んで良かったと感じるのは、例えばねふたで一緒に騒いだ、宵宮に行って夜店でヨーヨー買った、孫を連れて行って氷水を飲んだなどという思い出の積み重ねこそ、住みよい町だったなあとか、隣近所によく行ったなあとか、そういうことで募ることはあると思います。我々が10年先、20年先に弘前市に住んで良かったという人が、一人でも多くなっていたくためには、若い方は Facebook を使ってもいいですが、ホームページなどを見ない階層の人たちも含めた働きかけの仕方を目指すことも必要

だということを頭に入れておいた方がいいと感じております。弘前市ほど伝統ある、絆がある町はないのではないかと私自身は思っています。それを若い人たちに、伝えていきたいということからいけば、一番つながりのある団体である町会活動でまちづくりというのを中心に考えていくことが本来の姿だと思っています。

委員：各世代やターゲットをしっかりと考えながら、適切な情報発信が必要だと思います。高齢者に対しては、おそらく回覧板や防災無線、市の広報誌などの紙媒体が有効になるため、そういうところを築いていかないと、情報発信は難しいのかなと。他の委員がお話しされたような、誰にどのように届けるかというところをしっかりとこだわっていくのが大事だとあらためて思ったところです。

委員：「協働の部屋」は回覧板に入れたら良いと思います。説明の文字数が多いことを魅力として、新聞みたいな感じで読むことができていると思いました。また、市のアカウントでメンション（特定の相手を指定してメッセージを送る機能）していいのであれば、メンションするとメンションされたアカウントでも、紹介してくれたと思って、その記事を自分のアカウントでも流すので、市役所のフォロワーとは別のフォロワーが、市役所の記事を見ることになるという連鎖が続きます。その団体を応援している人は、そのツイートを、更にリツイートして自分のフォロワーに見せたりするのが続いていき、少しずつ見る人を増やせるのかなと思いました。

委員：協働は、知らず知らずのうちに、ほとんどの人がやってることだと思います。協働を意識してるか、してないか。市民が知らないうちにやっている事例を、知らないうちにあなたも協働してますみたいな、これも協働だったの気づきをまず与えることも重要だと思います。年代関係なくわかりやすい文章で、「あ、私もやっていた！」みたいなものがあるとちょっと楽しくないですか。

委員：市のホームページには役割があるし、Facebook、Twitter、インスタグラムも、似てるけど全然違うものです。Twitterは、災害の時に最新の

情報を手に入れる機能を持たせるために運用して、緊急事態の時に有益な情報をそこから得られるという意識を、日頃から持つてもらうためにやる。Instagramは、市民以外の人に、弘前は素敵だとアピールする時に良いツールです。Facebookは、市民協働課でこういうことやりましたとか。さらに、全市民に「きょう、どう？」ということをして「協働の部屋」とか発信する。「きょう、どう？」のコーナーみたいなのを、Facebookでブログみたいにやると、具体的な内容がわかると思います。また、子ども向けの情報も紙じゃないと伝わらないです。SNSで親に働きかけてもだめで、直接子ども達に伝えて、子どもがこれいいねと言ってもらえるように。遊び心も持ちつつ、市の仕事というスタンスで様々な情報を発信していったらいいと思います。その情報をいかに拡散してもらうかは、日頃の信頼関係になります。届けたい情報によって、方法を変えるというふうになれば発信しやすいから、回数や方法もわかりやすくなっていくような感じがします。

委員：人と人との熱が伝わるようにならないと行動に起きないし、つながらないと思います。市には市の発信方法があって、それを受け取った私たちが行動につなげ、双方向になるように広げていくのが必要です。私もできるとか、私はこうしてみようとか、あの人に伝えようとか、そういうふうに広げていくことが大切です。市役所の人を作って、受け取った私たちがこういう方法で、もっとたくさんの市民につなげていくというやり方がいいのではないのでしょうか。行動を起こそうという人をたくさん増やすということが、住んで良かった弘前市というふうにつながっていくのではないかなあとと思います。

委員：今まで学生へのアプローチだと、人文系の学生がこの分野に関心持つかないかなと思います。しかし、理系であれば、いろいろな機械に長けているとか、IT系に強い学生が、まちづくりに最初から関心があるかっていうと無いケースが多いです。しかし文系と理工系の学生が組みだしたら、強みを活かせるなと思います。市民協働課としても、理工系の学生に対してのアプローチ。その気になるようなところっていうのを考えて一緒にやっていただけると、とてもいいのかなと思うので、発言させていただきました。



委員：フォロワー数を伸ばすためには、共感することが大事だと思います。共感とかが欲しいと思ったら、アプローチの仕方でいいね！してくれるし、返してくれますのでアプローチが大事です。YouTube や TikTok、インスタグラムでもリールのような、気軽に簡単に見れる動画だと、見る人が増えたり、学生も見ている人が多いです。そのようにアプローチしていくことで、伸ばしていけるとと思います。

会長：そうですね、続けることも大事ですね。市民協働課も一生懸命頑張っていて続けていらっしゃる。誰もが協働によるまちづくりの一員という意識を持ち、自発的な取り組みにつなげるための発信となっているかということ言えば、やはり身近な市民生活に関わるような問題を、掘り起こしていくような情報提供の在り方が大事だと思います。そういう意味では健康づくりは、非常に身近な生活問題だと思います。

委員：健康づくりなども、行動に移してもらうためにも少しずつでも積み重ねて伝えていき、気づくということが大切だと思います。身近なみんなの問題について、市と市民がお互いにやってほしいことがあるだろうから、お互いに折り合いをつけるような形で進めていくのが協働だと思います。

会長：どうもありがとうございます。その他よろしいでしょうか。それじゃあ私からお話させていただきます。

「協働の部屋」第1号に、「協働によるまちづくりってなに」とありますが、誰が中心になっていくかというのが抜けているから動けないんですよね。そして、市民の役割の中に、市民から市に対して、こういうことで協働しましょうと提案していくような役割が必要だと思います。それができるようなシステムを作っていく必要があると思います。それから、市の役割がないのだけでも、市がやはり中心になって、協働を作っていくということと、市民からも提案していくことを加わっていくと、協働のまちづくりという意味が理解しやすいと思います。中核になって動かしていく主体として、市民も市に対してこういうことで助け合っていきましょうよ、私たちだけじゃなくて市とこうやって良くなりますよと市民からも提案できるような情報提供やシステム

を市民協働課が市民に対してやる必要があると思います。

そして、「学生ジャーナリストNo.1 決定戦」は、すごく良い事業だと思うので、続けていく必要がありますが、その他として、1%システムについても、事業成果発表会や事例集などをやっていますが、1%システム以外のまちづくり活動は、市民協働課で把握していますか。この学生ジャーナリストの事業は、まさにこういうまちづくりがありますよということを調べて、発信しているわけですよ。一般的なまちづくりを調べてこういうまちづくりもあるという形でいっぱい発信して、そのまちづくりの組織をいっぱい市民協働課が把握して、行われているまちづくりを発展させて、伸ばしていく視点も必要ですし、既存の組織に対して、協働のまちづくりの意味はこうですよ、もっと一緒にやりませんかとか、何か提案ありませんかという情報を流したらいいのではないかと。そういう意味でいろいろなまちづくりを把握して、紹介していくことは良いことだと思います。

委員：1%システム以外のまちづくりというお話でしたが、町会などの活動については、公民館でも発信していますので、市民協働課だけではなく、こっちからもあっちからも、わかるように情報発信していけばいいのかなと思います。

委員：誰が対象かわからないという課題に対して、手段とその手段に何を載せるかということに分けて考えていくと、どんな情報発信をしていったらいいのかという戦略が、見えてくるかなと思います。市民協働課の取り組み内容一覧で、載せる情報の内容と方法や手段が、ごっちゃになっているので、それを整理すれば、いい情報発信が出来そうな気がしてきました。

委員：ジャーナリストNo.1 決定戦は、どれくらいの人に参加して欲しかったのですか。

事務局：30件くらいは参加して欲しいと思い、周知をしました。

委員：すごく素敵な事業なのですが、賞金あるからやらない？みたいな感じ

に私は見えます。自分が住んでいるまちでキラリと光る素敵な活動の作品紹介をして欲しいというのが書かれていないんですよ。そういうことが追加されていたら、もっと素敵になるかなと思いました。

委員：協働ということを考えると、基本は、どれだけそれぞれの人が他の人と関わっていくかということだと思います。例えば、自分の家があって、会社があって、自分が欲しいものを買に行きお店があって、そこを車で行ったり来たりするだけでは、他の人とも地域とも一切関わりがないじゃないですか。ひょっとしたら隣の人と会っても挨拶もしないかもしれない。そうじゃないでしょうというのが、協働だと私は思っています。そして、協働に持っていくためには、どうしたらいいのかなって考えた時に、町会も大事です。町会では、春・夏に大掃除、ごみ拾いをやっているのであれば、みんなでごみ拾いやろうよと声をかけて、出てこない家があったら、「今日、町内の一斉のごみ集めだから、よろしくね！」と声かけて一緒にやってもらおうとか、そういう簡単なことだと思います。

会長：はい、ありがとうございました。市民協働課の情報発信は、すごく頑張っているんじゃないかなと思います。次回の審議会において、各課の取り組みをお話すれば、協働という言葉にも一層近づいていけるかなと思いますので、次回もよろしくお願ひします。

3 事務連絡

4 閉会